

ロバート・フロストと『ニューハンプシャー』の世界(その1)

藤 本 雅 樹

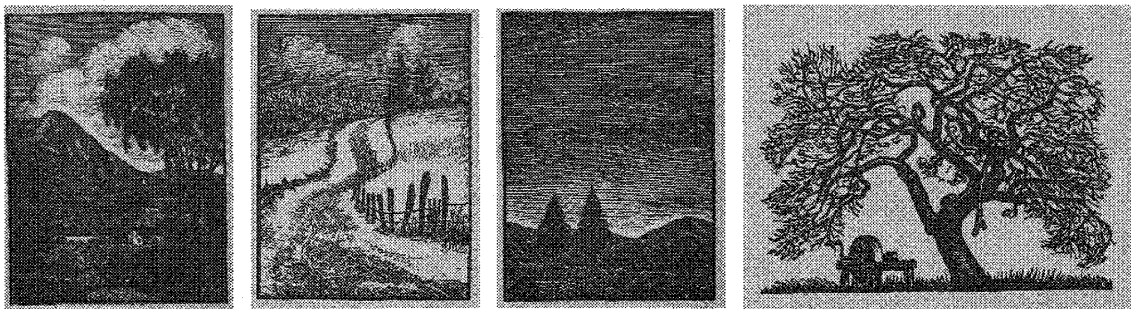
▶ キーワード

ニューハンプシャー
牧歌
諷刺
劇的物語詩
抒情詩
商業主義

▼ 要 旨

本稿では、ロバート・フロストの代表的詩集『ニューハンプシャー』(*New Hampshire*)に収められた各作品に関する詳細な分析をおこないながら、この詩集がいわば1つの有機体として、フロストの長い詩人の経歴の中でどのような位置にあり、どのような存在意義を有するものであるかという点について、考察をすすめていくことにする。今回はその第1回目として、巻頭に置かれた標題詩「ニューハンプシャー」の前半部を採り上げ、一見ランダムに見える詩人の変幻自在な語り口の妙味に耳を傾けながら、そこに展開される個々のエピソードの背後に見え隠れしている合衆国詩人フロストの複雑な意識の断層面に光を当ててみた。

I



第3詩集『山間の土地』(*Mountain Interval*) から数えて7年後の1923年11月15日に上梓

された第4詩集『ニューハンプシャー』によって、翌24年の5月11日にフロストは初めてピュリツァー賞の栄冠を射とめた。詩人50歳にしての快挙であった。標題作、長詩「ニューハンプシャー」を巻頭に、それを補うように配された「石舟の隕石」(“A Star in a Stone-Boat”)から「あなたに午前1時を歌いましょう」(“I Will Sing You One-O”)までの劇的独白や劇的物語詩13篇の注釈詩群(Notes:旋律、音符の意味も含まれている)と、後半部の「青の断片」(“Fragmentary Blue”)から「田舎の風物に通じることの必要性」(“The Need of Being Versed in Country Things”)までの30篇の装飾音的抒情詩群(Grace Notes)、そして初めての試みとして挿入された右の4枚の木版画(ヴァージニア州の画家J・J・ランクス制作、前頁図版参照)などから成るこの詩集は、生涯に彼が残した11冊の詩集の中でも、質・量ともに最も優れた詩集と見てよい。今ではなかなか耳にする機会が少ない表現かもしれないが、1923~1924年はフロストにとっていわゆる「驚異の年」(annus mirabilis)と呼ばれる最も充実した創作活動の時期であったと言っても過言ではないだろう。

また、自注の問題も含めた『ニューハンプシャー』のその特異な構成に関して言えば、当時のフロストの心の中には、前年発表されたT・S・エリオットの『荒地地』(The Waste Land)に対する意識があったとJ・F・リネンなどは指摘しているが¹⁾、フロストの場合は、エリオットとは異なり、古典や宗教、哲学などの外在的なないしは間接的な素材を典拠とするのではなく、「自注」がまさに主旋律である「ニューハンプシャー」に含まれる各エピソードに直接対応する注釈として、あくまで詩集内で完結するような、敷衍的な作品の形で具体化されたものという特徴を持っている。エリオットの詩が、作品内に意識的に組み込まれたいわゆる「客観的相関物」(objective correlative)なるものを通じて、悪くすれば読者層を限定したり、私たちに過剰な教養を要求したりする、ある種のペダンティックな要素を含んでいるのに対して、フロストの場合は、交響乐的な「ニューハンプシャー」のあとに配置された各劇的独白詩・対話詩群や抒情詩群そのものが、この長詩の中で展開されている様々な主題を、微視的なないしは敷衍的に変奏した小曲集となっており、この詩集を理解するために、読者は敢えて古今東西の芸術や宗教や文学に精通している必要はないという意味でも、自己完結性の強いものと言ってよいだろう。もちろん、『荒地地』の斬新な詩的実験に対する、そのフロスト的パロディー版だとする見方²⁾も1つの可能性として考えられなくもないが、ただフロストのここでの意図が、当時のエリオット、パウンドのモダニズムの中心的詩人の動向を横目にしながら、あくまでアメリカ人としてのアイデンティティの問題やアメリカそのものの土着性^{アルス・ポエティカ}を意識した地点から出発して、むしろ自らの詩人としての立場を明確にするための一種の詩^{ポエティック・マニフェスト}学ないしは詩的宣言の意味合いの方に力点を置くことにあった、と見る方がより妥当な読みの方向ではないかと思う。さもなければ、この詩集自体の持つその個性が、単なる『荒地地』への批判という枠内にパロディーという形で矮小化されてしまう恐れがある。この詩集の中で自由闊達に展開されているニューイングランドの風景が、およそ『荒地地』と対峙する位置に置かれるような世界とは本質的に異なるものであるということを、我々は思い起こす必要があるだろう。

さて、第1詩集『少年の心』から第3詩集『山間の土地』に到るまでの数年間、フロストはほぼ1年に1冊のペースで詩集を発表してきた。ところが、ここに来て7年間の足踏みと言ってもよさそうな、空白期間を置いている。そこには、彼の創作を停滞させるような、家族や友

人その他を巡る何らかの個人的ないしは社会的な理由や意味合いが隠されていたのかもしれない。もちろん、発表作品の数が多ければ良いというものでもなく、またむしろ『ニューハンプシャー』以降になるとこうした空白が一層顕著になるわけだから、さして問題にすべき事柄ではないと言ってしまうばそれだけの話で終わってしまいそうだが、それでも突如訪れたこの空白はやはり気になる。そこで、この間隙の問題を探るために、やや話が遠回りになるが、まずは第1詩集から第3詩集に到るまでのフロスト詩の全般的な傾向とその流れを俯瞰しておこう。

第1詩集『少年の心』(A Boy's Will, 1913)に描かれた世界は、詩人の内的葛藤を季節のサイクルに映して描き出したいわゆる「抒情詩」中心の内向的世界だったが、それに対して第2詩集『ボストンの北』(North of Boston, 1914)の場合は、「石垣修理」(“Mending Wall”)、「リンゴ摘みのあとで」(“After Apple-Picking”)、「薪の山」(“Wood-Pile”)、「良き時間」(“Good Hours”)の4篇の比較的短い抒情詩を除くと、あとはすべて劇的対話詩、独白詩、物語詩を中心にした12篇の作品群が配置されている。そして、それぞれの作品の長短に関わりなく、全体として対人間、対社会に関する外向的な問題に重心を置いた世界がここに展開されている。正にこの両詩集の間には、フロストの詩人としての重要な転換期の問題が隠されているのではないかということが、その対照的な詩集の性質を通じてある程度推測できる。さらに、次の第3詩集『山間の土地』も、第2詩集の路線に乗っているかのように、ほぼ同様の物語詩中心の世界が展開している。要するに、第1詩集から第3詩集までのフロスト詩には、内容と形式を支える創作態度の変化、いわゆる内から外へ向かおうとする大きな詩人内部の精神的変容の軌跡が印されていると見てはば間違いないだろう。しかも、このことは単にフロストの詩作品の世界だけに限定されるものではなく、特に1915年以降の彼自身の実生活そのものにも当てはまる問題となっているのである。

当時フロストは詩人としての名声が高まるにつれて、その公的な役割が増し、様々な人間や社会との接触の機会も多くなっていった。夫の健康問題や創作時間が犠牲になるのではないかと危惧する妻エリノアの気持ちをよそに、絶えず家計上の問題に腐心していたフロストは、様々な大学からの講演依頼に積極的に応じることになる。この当時の模様について、エリノアに関する唯一の伝記を書いたサンドラ・キャッツは次のように述べている。

…エリノアの主要な関心事はロブの詩と子供たちのことで、特に彼女は、子供たちには父親が必要で、父親が有名になったことで悩み始めていると感じていました。彼女はお金のことをいろいろ心配していましたが、彼が講演旅行を止めた場合に備えて、彼が稼いでくれている講演料に手を着けずになんとか遣り繰りしました。

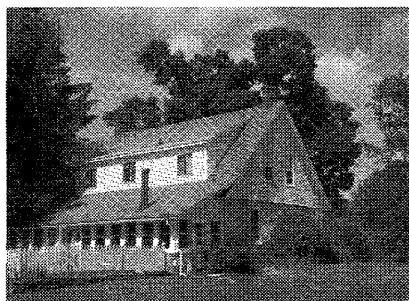
ロブはエリノアの態度に腹を立てました。彼女が自分の成功を妬んでいて、自分だけが農場から離れた生活を送ることができるのを憤慨していると、彼は思ったのです。彼女が正しいことは彼にもわかっていました。というのも、彼は詩を等閑にしていたのですが、ただ自分が既に創作力を失ってしまったと確信していて、そのため有名人としてなんとか成功したいと必死になっていたのです。ルイス・アンタメイヤに対して「僕の中の詩人はもう10年前に亡くなってしまいました」と打ち明けたことがありました。ところが、エリノアにはロブがふたたび書き始めることはわかっていました。過去の経験から彼女は、今回も最終的には通り過ぎてしまうような自己疑念の時期がまたやってきたのだと理解していたのです。これまでロブがまったく詩を書かなかったという年は1度もなかったもので、エリノアは彼がもはや書けないということを信じようとはしませんでした。³⁾

1915年5月7日、マサチューセッツ州のタフツ・カレッジから授与されたファイ・ベータ・カッパ詩人の称号を皮切りに、第4詩集出版の1923年11月までに、フロストはハーバード・カレッジ、アマースト・カレッジ、ミシガン大学、ヴァーモント大学、全米文芸協会等から、数々の名誉学位や特典を授かっている。特に1916年には、アマースト・カレッジの学長アレグザンダー・メイクルジョンからの招聘を受けて、翌17年に一家とともにアマーストに移り、そこの客員教授として教鞭をとることになった



D・C・フィッシャー

(尚、1921年にはミシガン大学に在留詩人として赴任)。しかし、道徳性に関して放任主義的なメイクルジョンとは基本的に考え方があわず、また詩作に打ちこみたいとの気持ちもあって、ついにフロストは1920年にアマーストを離れ、再び自宅のあるニューハン



ストーン・コテージ

プシャー州フランコニアの農場へ戻ることにした。ところが、この静かなフランコニアにあっても、多くの来客にわずらわされることがしばしばで、心の安まるいとまもなく、やがて作家のドロシー・キャンフィールド・フィッシャー⁴⁾の薦めやフランコニアの土地に馴染めなかった子供たちの教育環境の問題もあって、同年7月にヴァーモント州南西部のサウス・シャフツベリーに新たな住処（Stone Cottage）を買い求め、そこに引きこもることになったのである。この間、詩作ははかどらず、上の引用にも見られる通り、一時は詩人としての自己の将来に不安と絶望を感じたことさえあったようだ。トンプスンの報告によれば⁵⁾、1917年にフロストが雑誌類に発表した作品数は3篇、翌18年になるとわずかに1篇、そして19年には発表作品が無くなってしまふ（20年に入って創作が活発になる）。むろん、それまでに書きためたものや、ルイス・アンタメイや宛の書簡に同封されているような未発表のまま書き続けていた作品もあったわけだが（もちろん、作品の出来映えという問題はあるだろうが）⁶⁾、それらを敢て公けにしなかったということであれば、それはこの時代のフロストの中に何か重大な変化が訪れようとしていたことを逆に物語っていると言ってよいかもしれない。

要するに、内向的世界と外向的世界、私的生活と公的生活の間を行きつ戻りつしながら、このときフロストが直面した問題は、正に第1詩集と第2詩集の間に横たわっていた対社会意識に関する問題の裏がえしの状況、すなわち外から内への状況ではなかったかと思われる。個人を生かすはずの場だと信じていた社会が、逆にフロストや彼の家族の私的な生活の領域をも侵しつつある現実の中で、詩人としての自己の存在意義と役割について再考を促す葛藤の時期がこの時代の空白として現われているのだとすれば、第4詩集の持つ意味合いは極めて個人的、内省的色彩の強いものでもあったと言えるだろう。ちなみに、1931年の『アメリカの農村』(Rural America) 誌6月号に掲載されたインタビュー記事「詩と田園生活」(“Poetry and Rural Life”)の中でもフロストは、

「人生とは行きつ戻りつするものであると思う―農場に行けばより個人的になり、また都会に行けばより社会的になるものだ―そして、懸命にそのバランスをとるべきなのだ」

「現在、我々は社会的産業主義の世界に足を踏み入れすぎており、そろそろ引き返すべき所―それも己

を刷新するために引き返すべき所—までできているのである。…」

「思うに、人は靈感を得るために自分自身の中に引きこもらなければならないと、そうすれば再び人々の社会に戻ってきたときに、—それも、1人で『市場に出かけたときに』—その人は某かの人物になっているはず。つまり、人はほとんど無駄と思えるほど孤独にならなければいけないということを学ぶのだ」⁷⁾

と語りながら、この内から外へ、外から内への姿勢の相互関係を繰り返し強調している。このように、対社会、対個人の問題が彼にとっていかに重要な生涯のテーマの1つになっていたかという点を考え合わせると、第4詩集が、そこに収められた作品の円熟性はもちろんのこと、彼の創作態度の変遷の問題を辿っていく上でも、いかに見過すことのできない興味深い過渡的性質をも帯びたものとなっているかがわかる。それは、正に社会と個人の間に横たわる問題へのフロスト的アプローチの表明の1つとなっているのである。その意味で、第2、第3詩集と第4詩集の関係は、第1詩集と第2詩集の関係よりも、さらに一層微妙で複雑なフロストの意識構造を浮き彫りにしたものであると考えてよいかもしれない。特に『ニューハンプシャー』の後、1928年に上梓された第5詩集『西に流れる川』(*West-Running Brook*)によってフロストが、何故再び第1詩集に近い抒情詩中心の内省的世界へと遡行することになったのかという問題に思いを巡らせる時、第4詩集の微妙な側面がより一層明確なものになってくるのではないかとさえ思える。こうした双方向性は、正に内向的世界と外向的世界との接点に立つ回帰的な問題として、常にフロスト詩の流れに大きな影響を与える力となっており、彼の詩人としての基本的な意識の断層面がそこにはっきり記されていると言ってよいだろう。以上のように、第4詩集『ニューハンプシャー』は、フロスト詩変遷の流れの中において、第2、第3詩集と第5詩集の差異ないしは間隙を埋める要素を多分に孕んだ詩集と見てほぼ間違いはない。

今回、全44篇の作品群から成る『ニューハンプシャー』の中から最初に紹介するのは、標題詩「ニューハンプシャー」である。この長詩については、すでに同人誌や学会での研究発表の場で何度か取りあげたことがあるので、重複を避けるために話を端折って急ぎ足で通り過ぎていくべきかとも考えたが、やはり本稿では第4詩集の全作品を継続的に分析していくうえで、当然「主旋律」であるこの巻頭詩を再々考すべきと考え、敢えて自らの古い論考に屋上屋を架する愚を覚悟で、そこに多少なりとも新たな見解や誤謬の修正などを加えながら、詳細にその内容を検討していくことにした。

II

全413行から成る長詩「ニューハンプシャー」は、後年の2つの仮面詩劇『理性の仮面』(*A Masque of Reason*, 1945)と『慈悲の仮面』(*A Masque of Mercy*, 1947)を除けば、フロスト詩の中でも最も長い作品の1つとなっている。そして、詩の内容自体もこれまでの作品とはかなり趣きを異にしており、結論めいたことを先取りして言えば、ニューハンプシャーという不毛な土地の利点を詩的素材として最大限に生かすことによって、社会の中における詩人としての役割や姿勢を、皮肉や冗談をまじえながら自由闊達に表明するといった、半ば告白詩的な要素を含んだユニークな作品になっている。さらに言えば、文字通り詩集『ニューハンプシャー』の主旋律を成す作品であると同時に、自主独立の精神に負うべき合衆国本来の歴史的ヴィジョ

ンへの信頼と展望を秘めた「寓意的叙事詩」、あるいは、結果的に見れば来るべき第5詩集『西に流れる川』の中で展開される新たな抒情的世界への前奏曲にもなっていると見てよいだろう。

長詩「ニューハンプシャー」が書かれたのは、1920年代に入ってからのことだが、当時のフロストは周囲から国民詩人的な役割を大いに期待され、そして彼自身も様々な虚飾に満ちた戦後20年代の、あのロスト・ジェネレーションの精神風土を形成することになった物質的繁栄や道徳的頹廢の時代を迎え、合衆国に対する内外の批判の聲が高まりつつある中で、それらの声にやや閉口気味であったようだ。そうした風潮の中で、しだいに彼は合衆国への信頼を自己の詩作にどのような形で定着させればよいかという問題に心惹かれるようになっていった。そして、その1つの手段として選んだものが、合衆国の歴史的ヴィジョンの原点、すなわちデグレ・ゼロとも言うべき、ニューイングランド地方社会への精神的依存・依拠の方法であった。1922年7月のある日、家族が寝静まったあと、日頃遅筆な彼が、サウス・シャフツベリーのストーン・コテッジの食堂で夜の10時から翌朝の10時までの間に、一気にこの長詩を書きあげることになった。かつて彼は、この作品の中で日頃の恨み辛みを全て吐き出したと語ったことがあるそうだが、ここに描き出されたニューハンプシャーの世界の根底には、そうした個人的感情の問題を起点としながらも、さらにそれを超えた、明らかにアメリカ詩人としての新たな自覚と強い自意識が、軽妙洒脱な諷刺精神に支えられながら脈々と流れていることがわかるだろう。また、「ニューハンプシャー」創作のきっかけの1つとして、1922年から25年にかけて、『ザ・ネイション』(The Nation) 誌に全米各州に縁の深い著名な作家や評論家たちによる各州に関する文章を連載するという企画があり、フロストにもニューハンプシャーかヴァーモントについて書いて欲しいとの執筆依頼が寄せられた。そして、各州に見る商業主義の問題を通じて、合衆国を自己批評するというこの「あら探し」的企画が彼の気にそぐわなかったようで、最終的にはその依頼を断ることになった。商業主義に毒されつつあった合衆国の現状をただ社会批判的に見ようとする風潮に対して強い不満を感じていたからであった。しかも、その執筆者の顔ぶれが、L.H.MenckenやEdmund Wilsonのような主として急進的な反資本主義を唱える人々に偏っていたことも、全体主義的なものの見方を嫌うフロストの不信感を煽るものであった(例外的な執筆者に、ドロシー・キャンフィールド・フィッシャーが含まれていた)。ただし、そうしたネガティブな要素は別にして、州に関する記事執筆そのものには強い関心を寄せていた。その意味で「ニューハンプシャー」には、『ザ・ネイション』誌の企画に対する、フロスト一流の回答が示されていると見てもよいかもしれない。ちなみに、ニューハンプシャー州に関する文章を担当したのは、ラルフ・D・ペイン⁸⁾で、「ニューハンプシャー州—まだまだ捨てたものではない」(“New Hampshire—Not Yet Abandoned”, 1924年8月20日)と題する記事であった。それは、ニューハンプシャーに纏わる様々な貧困のイメージを最初に紹介しながら、最終的には新旧の時代の狭間で過去の桎梏にとらわれながらも、この州が未来への展望を失っているわけではないと強調し、主力産業である織物工業の他に、豊富な水資源を利用することによって様々な産業が育成されていく可能性があることを示唆する内容のものであった。また、都会生活に疲れた企業家たちが農場を買い求めたり、キャンパーたちがよく訪れたりする癒しの地であることも強調している。そして、ペインは最後にフロストの「ニューハンプシャー」から次の印象的な一節を引用して自州の独自性や独立性を強調しながら、この文章を終えている。

The glorious bards of Massachusetts seem
 To want to make New Hampshire people over.
 They taunt the lofty land with little men.
 I don't know what to say about the people.
 For art's sake one could almost wish them worse
 Rather than better. How are we to write
 The Russian novel in America
 As long as life goes so unutterably?
 There is the pinch from which our only outcry
 In literature to date is heard to come.
 We get what little misery we can
 Out of not having cause for misery.

どうやら マサチューセッツの誉れ高き詩人たちは
 ニューハンプシャーの人々を作り変えたいと思っているらしい
 彼等は卑小な人々の住むその高地をあざけり笑っているのだ
 でも僕には その人々について何を言ったらよいのかわからない 強いて言えば
 芸術のためには その人々が よい人間になるより むしろ
 悪い人間になることの方を 皆は望んでいるのだろう
 人生がかくも平穩に続いていく限り このアメリカで
 一体どのようにしてロシア小説のようなものを書くことができるというのか
 たしかに 今日にいたるまで 僕たちの文学における唯一の
 叫び声が聞こえてくるのは 苦境の中からである
 しかし みじめになる原因がないという事実から
 引き出せるみじめさなど しれたものではないか

(262-73)

さて、「ニューハンプシャー」という一見散漫で、冗長で、捉え所がなさそうに見えるこの作品にも、実はローランス・トンプスンやルーベン・ブラウアなどが指摘している通り、ホラティウス風の軽妙で酒脱な諷刺詩や牧歌詩の伝統が、特に『ボストンの北』以降のどの作品よりも、鮮明に反映している。ただ、ここで注意しておかなければいけないことは、ブラウアも語っているように、この作品が「単に田舎の味方をして現代的な生活や思想を排斥するものでもなければ、地方社会を宣伝しようとするものでもない」(“It is not a simple rejection of modern life and thought in favor of the country, nor a piece of provincial advertising.”)⁹⁾という点である。なぜならば、この作品のもつ諷刺性とは、ホラティウス流の諷刺と同様に、相手（あるいは自分自身）に非情な批判や攻撃を加えたりするようなものではなく、「説話と象徴、とぎれとぎれの対話、わずかな自画自賛と自己非難、ごくありふれた細々とした事柄、諺などの寄せ集めを通して、人間の愚かさの上に思いやりのある攻撃を撒き散らすこと」(“kindly attacks on human follies through a potpourri of anecdotes and symbols, snatches of dialogue, touches of self-appraisal and self-disparagement, homely details and proverbs.”)¹⁰⁾に主眼を置いたものとなっているからである。また、この作品には、一見すると、形式的な面で明確な物語の枠組といったものが用意されてはいないように見えるかもしれないが、内容的に見れば、J・F・リーネンが指摘している通り、明らかに大きく4つのパートに分けて考えることができるだろう¹¹⁾。そして、それぞれのパートは、その深奥において有機的な聯繫を保ちながら、まず

は地方社会の倫理の定義（1-60）に始まり、次いで1個の世界、宇宙としてのニューハンプシャーの姿の描写（61-214）を経て、さらには芸術的対象として高められたニューハンプシャーの世界（215-357）、そして最後にこの「不毛な」世界が現実を扱う手段としていかに詩人に有益なものであるかということの例証（358-413）へと進展していくのである。本稿では便宜上リーネンのこの分割法に従いながら、以下その内容を出来るだけ詳細に分析していくことにしよう。

まずは第1パートの全文引用から。

I met a lady from the South who said (You won't believe she said it, but she said it): "None of my family ever worked, or had A thing to sell." I don't suppose the work Much matters. You may work for all of me. 5 I've seen the time I've had to work myself. The having anything to sell is what Is the disgrace in man or state or nation.	He didn't even offer me a drink Until I asked for one to steady him. This is called having an idea to sell. It never could have happened in New Hampshire. The only person really soiled with trade 35
I met a traveler from Arkansas Who boasted of his state as beautiful 10 For diamonds and apples. "Diamonds And apples in commercial quantities?" I asked him, on my guard. "Oh, yes," he answered, Off his. The time was evening in the Pullman. "I see the porter's made your bed," I told him. 15	I ever stumbled on in old New Hampshire Was someone who had just come back ashamed From selling things in California. He'd built a noble mansard roof with balls On turrets, like Constantinople, deep 40 In woods some ten miles from a railroad station, As if to put forever out of mind The hope of being, as we say, received. I found him standing at the close of day Inside the threshold of his open barn, 45 Like a lone actor on a gloomy stage— And recognized him, through the iron gray In which his face was muffled to the eyes, As an old boyhood friend, and once indeed A drover with me on the road to Brighton. 50 His farm was "grounds," and not a farm at all; His house among the local sheds and shanties Rose like a factor's at a trading station. And he was rich, and I was still a rascal.
I met a Californian who would Talk California — a state so blessed, He said, in climate, none had ever died there A natural death, and Vigilance Committees Had had to organize to stock the graveyards 20 And vindicate the state's humanity. "Just the way Stefansson runs on," I murmured, "About the British Arctic. That's what comes Of being in the market with a climate."	I couldn't keep from asking impolitely, 55 Where had he been and what had he been doing? How did he get so? (Rich was understood.) In dealing in "old rags" in San Francisco. Oh, it was terrible as well could be. We both of us turned over in our graves. 60
I met a poet from another state, 25 A zealot full of fluid inspiration, Who in the name of fluid inspiration, But in the best style of bad salesmanship, Angrily tried to make me write a protest (In verse I think) against the Volstead Act. 30	

以上が「ニューハンプシャー」第1パートにあたるくだりであるが、ここに登場する5人の人物のうち最初の4人は、ニューハンプシャー州以外の州の人間で、最後の人物だけが語り手と同じニューハンプシャー州の人間となっている。前の4人については、それぞれがこのニュ

ーハンブシャー州の土地の倫理とは相容れないものとして、風刺をまじえながらユーモラスに描かれていることが分かるだろう。

まずは、最初の人物、南部の女性のエピソード（1-8行目）を通して語り手がここで問題にしているのは、ひとことで言えば南部の伝統的貴族主義と見てよいだろう。木で鼻をくくったようなこの女性の語り口「わが一族には、働いたり、売るようなものを所有したり／したことのあつた者は、いまだかつて1人もいませんわ」（“None of my family ever worked, or had/ A thing to sell.”）を通して、語り手は自分の考える労働の在り方が、本質的にはこの貴族主義的有閑生活とは異なるものであると軽く揶揄、諷刺しながらも、1つ間違えば負け惜しみの戯れ言に終わってしまいかねない、一歩手前の地点に踏みとどまったような格好で、ニューハンブシャー州の自主独立の生活倫理の中にこそ、本来あるべき人間社会の姿が活づいているのだという点を間接的に浮かび上がらせようとしていることがうかがえる。ジャブ攻撃のようなその軽妙な語りとは裏腹に、いささか足下の危うさを感じさせないではおかぬ出だしともなっている。ついでに、蛇足ながら、草稿段階ではこの女性は南部ではなくニューヨークからやってきた婦人となっていたが、やはりニューハンブシャーの貧しい田園社会と対峙する貴族主義的な職業倫理や生活倫理としては、旧南部の世界の方がよりふさわしいイメージを醸し出すとの作家的判断から、おそらくこう置き換えられたのではないかと思われる。また、最後に置かれた「売るものを所有しているというのは／州や国家にとって不名誉なこと」（“The having anything to sell is what / Is the disgrace in man or state or nation.”）という格言めいた発言には、産業資源の少ないニューハンブシャーが逆に過度な商業主義に毒されない有利な地点にあることを面白可笑しく伝えようとする詩人の、ある意味で痛ましくもあるような自慰的意図が見え隠れしていると言ってよいかもしれない。なお、7行目の“anything to sell”には〈「斧の柄」〉（“The Axe-helve”）参照という自注が付されているが、作品相互の内容的関連性については、また「斧の柄」を扱う際に詳しく触れることにする。（以下、「ニューハンブシャー」における自注箇所の問題は、当該作品についての分析をおこなう時にそれぞれの内容を検討していくことにしたい。）

話を第2の人物アーカンソー州の旅行者のエピソードに移すことにしよう。ここでの話題は、簡単に言ってしまうえばいわゆる田舎の成り上がり者的意識を持つ野卑な社会、産業主義に身売りをした地方社会へのシニシズムを暗示するものと見てよいだろう。やはりニューハンブシャー州の世界とは対照的な存在となっている。ただし、より皮肉な見方をすれば、歴史と伝統にしか自らの存在理由を求めることができず、合衆国全体の経済発展から取り残されたかのような、この東北部の貧困な田園世界からすれば、独立革命以後、経済発展の目覚ましい後発の諸州の躍進ぶりは、いたずらに羨望と嫉妬を掻き立てるものでしかなかったのかもしれない。だとすれば、ここで詩人は、自らの心の深奥でこの2つの感情を複雑に絡み合わせることによって、目の前にある現実世界の真相に歴史的な時空間の広がりがあることを感知させるような、仕掛けを創り出そうとしていると言ってもよいだろう。ただし、アーカンソーは実際にはダイヤモンドやリングの産出量を誇るような州というわけでは決してない。ここには、ニューハンブシャー州を自州より低く見ようとする、ある意味で詩人と同じようなメンタリティーを共有しているかもしれないこの旅行者の見栄と虚勢の可笑しさが、自らのことを棚上げにしながら、飄々と描かれている点に力点が置かれているととるべきなのだろう。特に、最後の寢床

云々のユーモラスなくだりからは、要するに、これ以上話をして無駄だという語り手の皮肉な感情が沸々と伝わってくる。

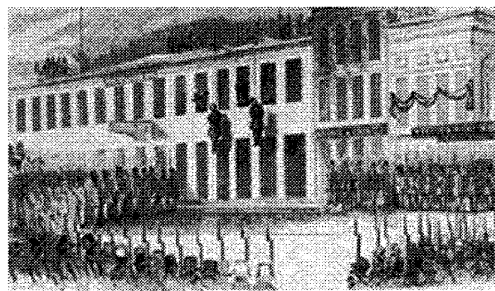
次に第3の人物カリフォルニア州の男のエピソードの場合は、文字通り西部劇でおなじみのアウトローの蔓る秩序なき社会、弱肉強食の世界への諷刺が暗示されていると考えてよいだろう。特に役人ではなく自衛団（“Vigilance Committees”）が、殺された者たちに墓を供給したり州の人間性を証明したりしなければならぬというくだりには、そうした諷刺的ポーズが

よく現われている。なお、22行目に登場するステファンスンは、カナダ生まれのアイスランド系米国人で、北極探検家のヴィルヒャウルマー・ステファンスン（Vilhjalmur Stefansson, 1879-1962）のことを指している。1919年以降、主に北極探検の体験を元に、著作業に専念し、特にイヌイットの研究や北極探検紀行等、多数の著書や評論、随筆を残している。ここで何故かフロストは“Steffansson”と綴っているが、正しくは“Stefansson”。また、ステファンスンは晩年ニューハンプシャー州ハノーバーにあるダートマス・カレッジで極地研究主任を務め、さらに同町の米国陸軍寒冷地研究所（US Army's Cold Regions Research and Engineering Laboratory）の設立メンバーの1人としても知られている。特に、フロストは『ニューハンプシャー』発表の前年にあたる1922年に出版されたステファンスンの北極探検紀行（*Hunters of the Great North*）を通じて、やはりそこにも不「自然な死に方」をする人間、すなわち人の手にかかったり、野獣に襲われたり、思わぬ事故にあったりして不慮の死を遂げる人間が少なくなかったことを知ったのであろう（ちなみに、フロストの読書目録には、この書籍の名前が残されている）。そして、それを彼が西部開拓時代のカリフォルニアの無法な社会状況と重ね合わせて見ていたことが十分推測できる。

最後の第4の人物、他州の詩人のエピソードに移ろう。ここには、当時のいわゆる急進的な共産主義的ないしは社会主義的（文学）活動の無神経さ、狡猾さに対する揶揄、諷刺がこめられていることが分かる。フロスト内部にある保守主義的な個人主義の傾向は、ややもすれば個を圧殺しかねない全体主義的なものの見方や、特定の思想活動に狂信的に傾斜することへの強い警戒感や疑念と、密接に繋がっていると言ってもよいかもしれない。

以上のように、これら4つのエピソードは、いずれもニューハンプシャーの田園世界、およびそこに生きる人間の物の考え方とは本質的に相容れない世界を象徴するものとなっているわけだが、ただしここに見られる語り手の諷刺的口調の中には、決して相手を打ち負かすような辛辣で攻撃的な響きは感じられない。この作品には、それが牧歌詩としての機能を十分に発揮しているという意味で、むしろここに示されている個々の地域の問題が、その地域性を超えて、実は通時的および共時的な観点を内包しながら、アメリカの歴史や社会全体の総合的な課題（すなわち、デモクラシーのヴィジョンの確立）へと発展していくような仕掛けが用意されていると考えたほうがよいだろう。

さて、問題となるのは最後の第5の人物の存在であるが、この男の場合は他の4人の状況とはかなり異なり、微妙なニュアンスを持った人物として登場してくる。カリフォルニア州で非



Charles Cora and James Casey are lynched by the Committee of Vigilance, San Francisco, 1856.

合法的な金儲けをし、再び故郷ニューハンプシャー州に戻ってきた人で、人間嫌いの世捨て人か、あるいは過去の罪を恥じるかのように森の中に屋敷を建て、ひっそりと余生を送っている、まるで隠者のような存在に見える。おそらく、この男は西部の無法地帯で辛酸を嘗めながら弱肉強食の生活を送ってきたのだろう。そして、そうした体験を通して人間の醜悪さ、罪深さを眼のあたりにし、いわば人生の虚無を認識するようになった人物として描かれていると考えてもよいかもしれない。ある意味で、このようなニューハンプシャー州の例外的人物のエピソードをここに置いたことによって、ニューハンプシャー州を始めとするニューイングランド地方の因習的なピューリタン社会への自己諷刺的な一面（さらに言えば、ゴールドラッシュに代表される西部開拓時代のスローガン「明白な運命」〔Manifesto Destiny〕の欺瞞性への共犯者的意識）が覗いていると考えられなくもない。特にこの人物が最後に語る「お互に墓に入っても安らかには眠れぬ身上同志」という言葉には、一見冗談っぽく発せられたかのように見えながら、その深奥にはピューリタンの原罪意識や功利的な選民思想に対する皮肉な感情が活づいているようにも思える。しかも、フロストの軽い口調によって、かなり緩和されているとはいえ、ここに見られる一連のイメージの暗さは、ニューイングランド社会のピューリタンの世界が醸し出すそれと決して無縁ではない。いずれにせよ、現世利益が神から約束されたものであるとするあの選民思想に基づくピューリタニズムの功利性の問題を念頭において考えると、この人物には物質的繁栄が必ずしも人生における幸福や成功に直接結びつくものではないことを、身をもって体験した同郷人の1人という役割があてがわれていると見てよいだろう。あるいは逆に、詩人としての成功と経済上の問題の間で終生悩み続けたフロスト自身の私生活を念頭に置きながら、彼がこの人物の経済的成功の話を通じて必ずしも商業主義的なものを全面否定しているわけでもないとするようなモーデカイ・マーカス¹²⁾の読みの妥当性も考慮すべきなのかもしれない。ただ、このニューハンプシャー出身者の遁世生活の背後には、

どうやって そんなになられたのですか（あえて金持ちと言わずとも そこは以心伝心）

サンフランシスコで「がらくた」を商ってです

なんと それじゃ まったくもってひどい話

お互いに 墓に入っても 安らかには眠れぬ身の上同士ってところでしょうか

(57-60)

という中間話法的な2人の対話に示唆されているように、語り手も含めて社会的ないしは経済的成功と背中合わせの関係にあるようなモラルティの問題意識を産み出すだけの、自虐的ないしは自己風刺的な精神性や歴史観が潜んでいることだけは間違いのないだろう。

以上のように、第1パートでは、主として他州との比較を通して見たニューハンプシャーの優位性の指摘や、逆にニューハンプシャーに内在するネガティブな因習的側面についての自己批評を通じて、この地方世界の卓越した精神性と倫理性の問題が扱われていたわけだが、次の第2パートに移ると、歴史的、地理的、文学的、経済的、政治的観点から見たより多様なニューハンプシャーの世界に焦点が当てられていく。特に、ここに登場する何人かの歴史上の人物たちやローカルな土地および小さなエピソードの数々を並べてみるだけでも、そこにはニューハンプシャー州の辿ってきた歴史や伝統の脈動が伝わってくると同時に、アメリカ合衆国そのものの歴史的風土の原点とも言うべき足跡が、にわかに象徴的な姿を帯びて浮かび上がってく

る。このような歴史意識の問題に関しては、そこにT・S・エリオットとの関連性を指摘することもできるだろうが、この点については次回の纏めの部分で詳しく触れることにしたい。

それでは、次に第2パートの内容を探っていくことにしよう。まずは、長い引用から。

Just specimens is all New Hampshire has,
One each of everything as in a showcase,
Which naturally she doesn't care to sell.
She had one President. (Pronounce him Purse,
And make the most of it for better or worse. 65
He's your one chance to score against the state.)
She had one Daniel Webster. He was all
The Daniel Webster ever was or shall be.
She had the Dartmouth needed to produce him.

I call her old. She has one family 70
Whose claim is good to being settled here
Before the era of colonization,
And before that of exploration even.
John Smith remarked them as he coasted by,
Dangling their legs and fishing off a wharf 75
At the Isles of Shoals, and satisfied himself
They weren't Red Indians but veritable
Pre-primitives of the white race, dawn people,
Like those who furnished Adam's sons with wives;
However uninnocent they may have been 80
In being there so early in our history.
They'd been there then a hundred years or more.
Pity he didn't ask what they were up to
At that date with a wharf already built,
And take their name. They've since told me their
name— 85

Today an honored one in Nottingham.
As for what they were up to more than fishing—
Suppose they weren't behaving Puritanly,
The hour had not yet struck for being good,
Mankind had not yet gone on the Sabbatical. 90
It became an explorer of the deep
Not to explore too deep in others' business.
Did you but know of him, New Hampshire has
One real reformer who would change the world
So it would be accepted by two classes, 95
Artists the minute they set up as artists,
Before, that is, they are themselves accepted,
And boys the minute they get out of college.
I can't help thinking those are tests to go by.

And she has one I don't know what to call him, 100

Who comes from Philadelphia every year
With a great flock of chickens of rare breeds
He wants to give the educational
Advantages of growing almost wild
Under the watchful eye of hawk and eagle— 105
Dorkings because they're spoken of by Chaucer,
Sussex because they're spoken of by Herrick.

She has a touch of gold. New Hampshire gold—
You may have heard of it. I had a farm
Offered me not long since up Berlin way 110
With a mine on it that was worked for gold;
But not gold in commercial quantities,
Just enough gold to make the engagement rings
And marriage rings of those who owned the farm.
What gold more innocent could one have asked for?
115

One of my children ranging after rocks
Lately brought home from Andover or Canaan
A specimen of beryl with a trace
Of radium. I know with radium

The trace would have to be the merest trace 120
To be below the threshold of commercial;
But trust New Hampshire not to have enough
Of radium or anything to sell.

A specimen of everything, I said.
She has one witch—old style. She lives in
Colebrook. 125

(The only other witch I ever met
Was lately at a cut-glass dinner in Boston.
There were four candles and four people present.
The witch was young, and beautiful (new style),
And open-minded. She was free to question 130
Her gift for reading letters locked in boxes.
Why was it so much greater when the boxes
Were metal than it was when they were wooden?
It made the world seem so mysterious.
The S'ciety for Psychical Research 135
Was cognizant. Her husband was worth millions.
I think he owned some shares in Harvard College.)

New Hampshire used to have at Salem
 A company we called the White Corpuscles,
 Whose duty was at any hour of night 140
 To rush in sheets and fool's caps where they smelled
 A thing the least bit doubtfully perscented
 And give someone the Skipper Ireson's Ride.

One each of everything as in a showcase.
 More than enough land for a specimen 145
 You'll say she has, but there there enters in
 Something else to protect her from herself.
 There quality makes up for quantity.
 Not even New Hampshire farms are much for sale.
 The farm I made my home on in the mountains 150
 I had to take by force rather than buy.
 I caught the owner outdoors by himself
 Raking up after winter, and I said,
 "I'm going to put you off this farm: I want it."
 "Where are you going to put me? In the road?" 155
 "I'm going to put you on the farm next to it."
 "Why won't the farm next to it do for you?"
 "I like this better." It was really better.
 Apples? New Hampshire has them, but unsprayed,
 With no suspicion in stem end or blossom end 160
 Of vitriol or arsenate of lead,
 And so not good for anything but cider.
 Her unpruned grapes are flung like lariats
 Far up the birches out of reach of man.

A state producing precious metals, stones, 165
 And—writing; none of these except perhaps
 The precious literature in quantity
 Or quality to worry the producer
 About disposing of it. Do you know,
 Considering the market, there are more 170
 Poems produced than any other thing?
 No wonder poets sometimes have to seem
 So much more businesslike than businessmen.
 Their wares are so much harder to get rid of.
 She's one of the two best states in the Union. 175

Vermont's the other. And the two have been
 Yokefellows in the sap yoke from of old
 In many Marches. And they lie like wedges,
 Thick end to thin end and thin end to thick end,
 And are a figure of the way the strong 180
 Of mind and strong of arm should fit together,
 One thick where one is thin and vice versa.
 New Hampshire raises the Connecticut
 In a trout hatchery near Canada,
 But soon divides the river with Vermont. 185
 Both are delightful states for their absurdly
 Small towns—Lost Nation, Bungey, Muddy Boo,
 Poplin, Still Corners (so called not because
 The place is silent all day long, nor yet
 Because it boasts a whisky still—because 190
 It set out once to be a city and still
 Is only corners, crossroads in a wood).
 And I remembered one whose name appeared
 Between the pictures on a movie screen
 Election night once in Franconia, 195
 When everything had gone Republican
 And Democrats were sore in need of comfort:
 Easton goes Democratic, Wilson 4
 Hughes 2. And everybody to the saddest
 Laughed the loud laugh the big laugh at the little. 200
 New York (five million) laughs at Manchester,
 Manchester (sixty or seventy thousand) laughs
 At Littleton (four thousand), Littleton
 Laughs at Franconia (seven hundred), and
 Franconia laughs, I fear—did laugh that night— 205
 At Easton. What has Easton left to laugh at,
 And like the actress exclaim "Oh, my God" at?
 There's Bungey; and for Bungey there are towns,
 Whole townships named but without population.
 Anything I can say about New Hampshire 210
 Will serve almost as well about Vermont,
 Excepting that they differ in their mountains.
 The Vermont mountains stretch extended straight;
 New Hampshire mountains curl up in a coil.

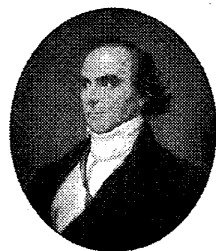
「ニューハンプシャーにあるものはどれも、まさに標本そのもので／すべてが1つずつそろ
 っていて、さながら陳列箱に収められたかのよう／だから、手放したくないと思うのも当然の
 こと」(“Just specimens is all New Hampshire has, / One each of everything as in a showcase,
 Which naturally she doesn't care to sell.” ll.61-3) という、第2パートのこのユーモラスな出だ
 しの言葉は、「ニューハンプシャー」のメイン・テーマを総合的に捉えた表現であり、一種の

通奏低音のような効果を発揮しながら、本詩全体に響き渡っている語り手（＝詩人）の声そのものとなっているかのようだ。さらには、第2パートの最も重要なポイントとなるキー・フレーズと言っても過言ではないだろう（これに類した表現の繰り返しが、それぞれの節の冒頭124行目と144行目に効果的に配置されている）。特に、語り手の淡々としたユーモラスなその語りは、すでに第1パートに関する話の中でも少し触れておいた通り、斜陽性ないしは不毛性に対する複雑な感情を内包しながらも、ニューハンプシャー州にはすべてのものが揃っており、しかもその量が少ないことで、逆に都市社会に蔓延している商業主義に毒されない優位性があり、その結果ありとあらゆる領域にわたって質の高い資源や人間や芸術が保存されているのだという点を明確に伝えるメッセージとなっているのである。そして、この語り手の口調の深奥には、自己の文学の方向をこのニューハンプシャーの調和のとれた姿に結びつけようとするフロストのしたたかな詩人としての気概や抑制的な息遣いさえ感じられる。その意味で、以下に例示されているエピソードの数々は、決して単なるお国自慢の話の「寄せ集め」となっているわけではない。詩人をとりまくこの素朴なニューハンプシャーのミクロ的世界が、実は（合衆国に寄せる）フロスト自身の原型的な文学ヴィジョンを投影するものとして、極めて意識的に提示されていると見るべきなのだろう。ただし、語り手自身の中には、次に登場してくるニューハンプシャーの代表的政治家たちのとった政治判断が、合衆国の歴史において必ずしも高い評価を受けているわけではないという一般論への意識があるせいか、その微妙な口調には、彼らへの畏敬の念と同時に、やはり自嘲的ないしは自虐的な響きをもが含まれているように思えてならない。

それでは、さっそく第2パートの各エピソードの具体的な内容に話を移していくことにしよう。まず、64行目に登場する「パース」（“Purse”）は、言うまでもなく、第14代大統領のフランクリン・ピアス（Franklin Pierce, 1804-69）のことを指している。ピアスをパース（がま口）と発音するのはニューハンプシャーの地方訛りであると同時に、政治家として計算高く、凡庸であった彼に対する痛烈な皮肉と解することもできるだろう。民主党選出の彼は、ニューハンプシャー州生まれの生粋の北部人でありながら、支持基盤の弱い自己の政権維持のために、いわゆるカンザス・ネブラスカ法案（1854年）を支持し、奴隷制を死守しようとする南部との迎合型政策をとったが、そのために、後に南北戦争誘発の火種を撒いた大統領として汚名を残すことになった。



フランクリン・ピアス



ダニエル・ウェブスター

次に登場するダニエル・ウェブスター（Daniel Webster, 1782-1852）は、フロストも一時在籍していたダートマス・カレッジの卒業生で、弁護士時代や政治家時代に、数々の名演説を残している。元来彼は、基本的には奴隷制反対論者であったが、あくまで連邦制を維持すべきだとする立場から、妥協による南北間の平和維持と連邦の分裂回避につとめた。そうした状況の中で、1850年3月7日に彼は奴隷制に譲歩する「1850年の妥協」（The Compromise of 1850）を支持する演説をおこない、北部の反感を買うことになってしまった。結局、これが彼の最後の演説となったのだが、ピアス大統領と同じように、ウェブスターも最終的な政治判断として、北部の同胞の感情を害することになっても、連邦政府の分裂という最悪の事態を回避する道を選択・支持した人物だっ

たわけである。歴史的・政治的評価の優劣の問題は別として、当時の複雑で困難な混沌たる政治状況の中で、彼らもまたアメリカの歴史に重要な足跡を残したニューハンプシャーの代表的人物であったことだけは否めないというわけなのだろう。

70行目から92行目に移ると、歴史教科書のように植民地時代ないしはそれ以前の、いわゆる先住民にまつわるエピソードが紹介されている。出だしの“*She has one family*”と言え、まずはニューハンプシャー州に生き残っている先住民の子孫のことが自然に連想されてくるだろう。この直後に登場するジョン・スミスは、周知の通り、プリマス植民地よりさらに13年前に建設された南部バージニア植民地の指揮官であり、例のポカホンタス絡みのエピソードでもよく知られた人物。その彼がこのニューハンプシャー地域を含む東北部、特にボストン北部のポーツマス南東の沖合9マイルの所にある「ショールズ群島」において、ある一族の祖先にあたる人々の姿を見かけたことがあるというここでの一節は、彼の探検記『バージニア、ニューイングランド、サマー諸島の歴史』(*The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles*, 1624) を念頭に置いたものと考えてよいだろうが、ただしこの一族の祖先が先住民ではなく白人であったとの作り話には、むろんストーリー・テラー的な法螺話の伝統が感じられると同時に、家系の古さへの誇りや伝統に縋ろうとするニューイングランド人の過剰な自意識に対するアイロニックな風刺も含まれているのだろう。参考までに、スミスの探検記の中から、コッド岬およびマサチューセッツ湾付近を北に向けて航行していた一行の模様を伝える一節を紹介しておこう。



ジョン・スミス

Then come you to Accomacke an excellent good Harbour, good land, and no want of any thing but industrious people: after much kindnesse, wee fought also with them, though some were hurt, some slaine, yet within an houre after they became friends. Cape Cod is the next presents it selfe, which is onely a headland of high hills, ouer-growne with shrubby Pines, hurts and such trash, but an excellent harbour for all weathers. This Cape is made by the maine Sea on the one side, and a great Bay on the other in forme of a Sickell, on it doth inhabit the people of Pawmet, and in the bottome of the Bay them of Chawum: towards the South and South-west of this Cape, is found a long and dangerous shoule of rocks and sand, but so farre as I incercled it, I found thirty fathome water and a strong currant, which makes mee thinke there is a chanell about this Shoule, where is the best and greatest fish to be had winter and summer in all the Country; but the Saluages say there is no Chanell, but that *the Shoales* beginne from the maine at Pawmet to the Ile of Nawset, and so extends beyond their knowledge into the Sea. The next to this is Capawucke, and those abounding Countries of Copper, Corne, People and Mineralls, which I went to discover this last yeere, but because I miscarried by the way I will leaue them till God please I haue better acquaintance with them.

ボストン南にあるコッド岬近辺を北に向かって探検していたジョン・スミス一行と土地の先住民との接触の模様や、周辺の地理的な説明から当時のこの未開の地域の様子がそこはかたなく浮かびあがってくる記録である。なお、時の英国王子チャールズの賛同を得て、マサチューセッツ湾植民地からメインに至る東北部地域をニューイングランド命名したのは、ジョン・スミスその人であった。

ともかく、この先住民がこの土地に住み着くよりもさらに早い時期に、実は白人の祖先が先客として定住していたのだとする話の背後には、歴史の事実をも逆転させうような宗教的、

政治的、人種的ドグマが、特に英国系の東部人の中に根深く潜んでいることを暗に伝えようとする詩人の意図があるのかもしれない。ニューハンプシャーを含むニューイングランド社会の歪曲した歴史観が、ジョン・スミスの意識のフィルターを通して滑稽に投写されていると同時に、詩人の思考回路はより思弁的でより複雑な様相を呈しながら、現在のニューハンプシャーの現状打開に求められる人物像を提示してみせてくれる。歴史の真実とは何か。過去の謎探しが、結局現在に生きる私たちに必ずしも幸福な結果をもたらしてくれるとは限らないとすれば、「物事の深淵を探求する人にふさわしいおこないとは／他人の事に深入りしないこと」(“It became an explorer of the deep/ Not to explore too deep in others’ business”)という詩人の言葉からは、ある意味で鬱屈したニューハンプシャーの人々の意識の中に暗い影を落としている過去の歴史に対する過剰なまでの思い入れを払拭するような決意が感じられはしないだろうか。それが、ここでは極めて軽妙な語り口によって、その深刻さが軽減されているとはいえ、やはりニューハンプシャーという土地柄に対する詩人の位置関係に微妙な距離を作り出しているように思えてならない。

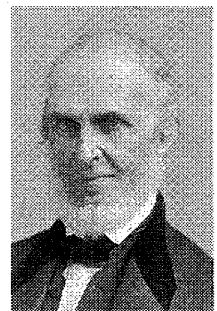
次の93行目から99行目にかけてのくだりにおいて話題は、上の話の流れを受けて、過去から一足飛びに現代へと移っていく。過去の経験を試金石として、それに縋りついてきた古いタイプの東部人、特にニューハンプシャー人の殻から脱却するためには、まさに新しい「物事の深淵を探求する人」すなわち「世の中を変えてくれる真の改革者」(“One real reformer who would change the world”)の登場が望まれるというわけである。そして社会の慣習にとらわれない世代の代表として、「開業したての新米の芸術家や／…／大学を出たばかりの若者たち」(“Artists the minute they set up as artists,/ …/ And boys the minute they get out of college.”)の存在がクローズアップされる。手放しにニューハンプシャーの利点のみを強調するのではなく、詩人は絶えずこうした自己批評的な視点を保ちながら、より冷徹な目で歴史という時間相と社会という空間相の双方を眺めていると言えるだろう。そこには、もはや虚像にしがみつこうとする意識はない。

さて、次の100行目から107行目に登場する、一風変わった人物のエピソードには、デリー農場時代(1900-9)にフロスト自身が関わった養鶏業の経験が織り込まれていると見てよいだろう。ちなみに、フロストが詩集『ニューハンプシャー』のある1冊の中に残した書き込みによれば、この人物はコーネリアス・ウェイガント(Cornelius Waygandt, 1871-1957)のことを指しているようである。彼は、「ニューハンプシャーのヤンキーとペンシルバニアのオランダ人の中間的な人物で、農夫と教授を足して2で割ったような、何とも表現しがたいような人」とフロストはコメントしている。要するに、計算高くて、知的な面と野卑な面が共存する不思議な人物ということから、詩人の目にはまさに「名状しがたい人」(“one I don’t know what to call him”)と映っていたのだろう。話が少し横道に逸れるが、デリー農場時代、特に1903年からの5年の間にニューイングランドの2つの養鶏雑誌に、フロストは養鶏の経験を綴った11篇の体験記のような物語作品を発表している。ここで言及されている鶏の品種や養鶏に関する知識は、この時代に培ったものであることは容易に想像がつく。ただし、チョーサーやヘリックの作品には、ここで詩人が語っているような鶏の話は登場しないという点を言い添えておこう。要は、この2種類の鶏がいかに古くからある種類のものであるかを示すための、いわば詩人の意図的な誤謬ないしは擬装事実と考えるべきなのだろう。

108行目から始まるニューハンプシャー産出の金のエピソードは、この作品の主題の1つに関わる質と量の問題を、より具体的な日常のエピソードに置き換えたものとなっている。特に、「ただし 商売ができるほどの量の金とはいかないが、／農家の人たちの 婚約指輪や結婚指輪を作るのに／充分 間に合うだけの量はある。／果たして この金以上に汚れない金が見つかったためしなどあっただろうか？」（“But not gold in commercial quantities, / Just enough gold to make the engagement rings/ And marriage rings of those who owned the farm./ What gold more innocent could one have asked for?”）という一節には、ニューハンプシャー州の土地の不毛性を逆手にとり、だからこそ商業主義に毒されずに純粹性、無垢性を保っているのだと主張する、フロスト一流のユーモラスな逆説的意味合いが込められていることは、もはや指摘するまでもないだろう。以下に登場するラジウムやエメラルドのエピソードについても同様の価値基準に基づく判断が詩人の中で働いていることが分かる。なお、ここに登場するバーリンは、ニューハンプシャー州北部コース郡の山間にある町、アンドーバーは同州中部メリマック郡にある山間の区域、さらにカナーンは同州北西部グラフトン郡にある山間の区域のことを指している。

次の124行目から137行目の一節の冒頭に、前節の最後の言葉「でも はっきり言って ニューハンプシャー州には／売り物になるほどの ラジウムのたぐいはないのだ」（“But trust New Hampshire not to have enough/ Of radium or anything to sell.”）を受け、この詩の主旋律（主題）のバリエーション「要するに ありとあらゆるものの見本といった具合」（“A specimen of everything, I said.”）が置かれ、その不毛性を逆手にとったかのような、詩人の半ば「強がり」とも見える姿勢が抑制の利いた形で展開されていく。話題は、再びニューハンプシャー州在住のある不可解な人物に向けられる。「時代遅れの魔女」（“one witch—old style,” l.125）となっているが、ニューハンプシャーをはじめとして、このニューイングランドで「魔女」となれば、当然ピューリタンの時代の「魔女裁判」に関わる話題やイメージの連想が湧いてくるのが自然だろう。今回は、この箇所が付された自注と当該作品の詳しい内容および関連についての説明は割愛するが、ただ死者との霊体験を綴った『『コース郡の魔女』56頁を参照』（Cf. page 56, “The Witch of Coös.”）となっていることから、少なくとも詩人の中には、未だに超自然的な力を宿した人間が存在したり、不可思議な出来事が起こったりしうるだけの暗澹たる過去の歴史の汚泥が、この地方の精神文化の底辺に堆積しているという意識があったのだろう。特に最初に登場する現存の「時代遅れの魔女」には、そうした歴史の影が見え隠れしているように感じられる。ところが、それとは対照的にその後に紹介される、不思議な透視能力と美貌と寛容さを備えた都会的でサロンの有閑マダムのような魔女の場合は、どことなくマサチューセッツ州の「ボストン」の社交界を中心とする「お上品」で卑俗な人々の姿を彷彿とさせるだけに、詩人の意図は明らかに、権力や権威といった社会的な力学が創り出す魔法を、一見それに賛辞を表しつつも、最終的には皮肉を織り交ぜながら淡々とした口調で揶揄していく点にあると言ってよいだろう。

さて、138行目から143行目までの短い一節で紹介されている、セーラムの「ホワイト・コーパスルズ」のエピソードは、フロストが少年時代に聞き知ったものかもしれない。なお、セーラムはニューハンプシャー州ロッキン



J・G・
ホイッティア

ガム郡南端、マサチューセッツ州との州境付近にあり、フロストが少年時代を過ごした町の1つ。43行目にある“Skipper Ireson’s ride”には、言うまでもなくホイットィアの物語詩「アイアスン船長の引き回し」(“Skipper Ireson’s Ride,” 1857)の読書体験からの影響もあるだろう。

Body of turkey, head of owl,
Wings a-droop like a rained-on fowl,
Feathered and ruffled in every part,
Skipper Ireson stood in the cart.
Scores of women, old and young,
Strong of muscle, and glib of tongue,
Pushed and pulled up the rocky lane,
Shouting and singing the shrill refrain:
“Here’s Flud Oirson, fur his horrd horrt,
Torr’d an’ furtherr’d an’ corr’d in a corrt
By the women o’ Morble’ead!”
…… (中略) ……

Small pity for him!—He sailed away
From a leaking ship in Chauler Bay, --
Sailed away from a sinking wreck,
With his own town’s-people on her deck!
“Lay by! Lay by!” they called to him.
Back he answered, “Sink or swim!
Brag of your catch of fish again!”
And off he sailed through the fog and rain!
Old Floyd Ireson, for his hard heart,
Tarred and feathered and carried in a cart
By the women of Marblehead!
(stanzas 2 & 4 from “Skipper Ireson’s Ride,”)¹³⁾

ちなみに、フロストの読書目録 (David W. Tutein, *Robert Frost’s Reading: An Annotated Bibliography*. Lewiston, N.Y.: The Edwin Mellen Press, Ltd., 1997.) の中には、ホイットィアの作品集が含まれており、特に高校時代のフロストは当初そのスタイルに反発を抱いていたものの、後にはロングフェローよりもホイットィアを好んで読むようになったらしい。ともかく、ベッティ号の船長フロイド・アイアスン (Floyd Ireson) は、1808年、強風を受けて沈没の危機に瀕していた他船、およびそれに乗合わせていた同じ町 (マーブルヘッド) の人々の救出を放棄して立ち去っていった。そのため、その後この漁村 (18世紀終盤には最も規模の大きな植民地の1つとなっていた) の人々に捕らえら



「アイアスン船長の引き回し刑」

れて、市中引き回しの刑罰を受けることになった。全身にタールを塗られ、その上に鶏の羽を沢山貼り付けられて、町の女性たちから手厳しく罵られながら晒し者として、荷馬車に乗せられて町中を引き回されていった。まさに船長として許し難い非情な行為をおこなった、卑怯千万な人物というわけである。ここには、かつてマサチューセッツ州で実際に起きたこの古い事件を念頭に置きながら、詩人は、例えば異分子 (細菌) に攻撃をしかける「白血球」 (“White Corpuscles”) という、あの白人優越主義のKKK団のような排他的活動を連想させる私刑集団に対して、子供心に味わった不気味な経験を披露しようとしているのかもしれない。ここでは、血祭りにあげられる対象が何であるかは明示されていないが、少なくともこの地方社会の過激な排他主義者から見れば、それがコミュニティの安定を脅かしかねない存在であることだけは間違いない。

続く話題の転換点にあたる144行目の冒頭で、再び詩人は、やや脱線気味になりかけた話の軌道を修正すべく、この作品のテーマへの回帰を促すかのように、第2部冒頭および124行目で独白的な語りによる「陳列棚」の喩えを繰り返すことになる。そして、この通奏低音とも言うべき声が、次に並べられたいくつかのエピソードや語りの中で、不毛なニューハンプシャー

がその質の点から見れば、いかに優位な地点にあるか（「質が量を補っている」1.148）を付加的に例証していくことになるのである。

最初の農場入手のエピソードは、英国から戻って間もない1915年の4月にウィリアム・ハーバートという農場主から1,100ドルで買いとったニューハンプシャー州フランコニアの農場に纏わる話である。フロストは帰国後再び、妻エリノアの希望でもあったデリー農場時代のような田園生活の再現を願っていた。デリー農場時代、枯草熱の季節が来るたびに、療養を兼ねてよく足を運んだこの州北部のフランコニアは、フロストお気に入りの土地で、フランコニア農場を手に入れるまでの間、一時家族をあずけていたベスレヘムのジョン・リンチ（第3パートに登場する）の農場があったのもこの地域であった。この農場からは、この詩に登場するラファイエット山やカナーン山等の、いわゆるホワイト山脈の高峰が東方向、ほぼ真正面に一望で

き、毎年夏になるとフロストは子供たちを連れてこれらの山々に登っていた。先のカナーンの山やエメラルドに関するエピソード（117、118行目）は、明らかにこのフランコニア時代（1915-20）の体験に基づいたものであろう。ただ、実際のところ、フランコニアでの農場生活も、結果的には必ずしもフロスト一家の期待通りのものとはならなかったようだ。



フランコニア農場

フランコニア農場の冬はとても寒くて、気温が急に下がると小さな家屋の回りでは風が唸り声をあげました。つい最近の試練（7度目の妊娠と流産）によって衰弱していたエリノアは、こんなに北の農場を買ったのは間違いではなかったかと思うようになりました。それに、氷点下の天気の日歩いて通学しなければならない子供たちのことが気がかりでした。キャロルはいつも咽が痛み、マージョリーは何度も風をひいて寝込みました。この農場がもたらしてくれる隠遁生活を大いに評価していたのですが、エリノアは自分たちの決断を後悔しました。2月になると、農場がどんなに遠隔にあっても、それで私生活が保証されるものではないということもわかってきました。

1916年2月11日の金曜日、フランコニアの典型的な平日の朝、気温が零下華氏12度になりました。9時になってもロブはまだベッドの中で、子供たちはすでに学校に出かけてしまっていました。そのときエリノアはドアをノックする音を聞きました。自分たちのところに訪問者があるとは信じられなかったので、彼女は数分そのまま待ちました。ノックの音が続きました。自分たちの農場にやってくる可能性のあるのはいったい誰なのだろうか？ 玄関のドアを少し開けると、エリノアは2人の見知らぬ都会の人と対面することになったのです。¹⁴⁾

次の159行目から164行目では、ニューハンプシャーの林檎と葡萄が話題となる。フロスト詩の中には林檎の実や林檎の木を扱った作品が20篇ほどあるが、その中でも第2詩集『ボストンの北』に収められた「林檎摘みを終えて」（“After Apple-Picking”）は最も人口に膾炙している作品である。

果柄と 花床と 小豆色の斑点のひとつひとつを
くっきりと 浮かび上がらせながら
現れては 消えていく 巨大な林檎たち

… (中略) …

そして 今も僕の耳の奥では 地下の貯蔵庫から
次つぎに 移しあけられる 林檎の実が
ごとごと 鳴っているのが 聞こえている
これも 林檎摘みをやりすぎたせいなのだ
そう 今の僕は 自らが強く欲した
この大収穫に 体の芯まで疲れきっているのだ
そっと手で触れ 慈しみ 枝からもぎ取って 下に落とさぬように
しなければならない林檎の実が 無数にあった
なぜなら たとえ傷がついたり 刈り株に突き刺さったりしていなくとも
地面に 打ちあたった実は
すべて
何の価値もないものとして
確実に 林檎酒用の林檎の山に 運ばれていくことになるからだ

(18-36) ¹⁵⁾

ニューハンプシャーの林檎には、いわゆる商品価値のあるものが少ない、ないしは収穫量に問題あり、といった弱点があることを認めつつも、まさに無農薬の自然栽培という意味では、人間に危害を及ぼす恐れはないと、詩人は嘯く。そして、このエピソードにも、例によって、だからこそ商業主義に毒されずに純粹性、無垢性を保っていているのだと主張するかのような、フロスト一流のユーモラスな逆説的意味合いが込められていることがわかる。葡萄の話の詳細については、別致において「野葡萄」(“Wild Grapes”)の中で詳しく述べることにするが、ここでは白樺の木の上の方に実った野葡萄摘みの話題が、(おそらく詩人自身の)少年時代の自然に対する興味津々の経験に根ざしたものであり、いわゆる市場を意識した経済活動とはまったく無縁の世界を暗示するものとして紹介されていることを指摘するだけに止めておきたい。

165行目から174行目に移ると、詩人はニューハンプシャーへの愛憎半ばする意識を抱きながら、自己の芸術家としての姿勢をより明確に打ち出していく。ラルフ・D・ペインが、先の記事の冒頭で、打ち棄てられた農家や、胸の薄い痩せこけた未亡人、孤独に苛まれた狂気寸前の農家の主婦といった不毛なイメージを持ち出しながら描いてみせたような、ニューハンプシャーのネガティブな姿は、フロスト自身の中でも恐らく否定しがたい事実として心の奥底に沈殿していたものであろうが、負け惜しみとも自負心ともつかないような微妙な感情の狭間に立って、その現実を敢えて受容しながら、彼特有のペースとユーモアと皮肉を交えながら、自らの文学の在り方を開陳してみせる。「武士は食わねど高楊枝」という自負心だけを頼りにしては、家族の生活や自らの作家活動を支えていくことが困難であることを誰よりもよく承知していた彼は、だからと言って商業主義に阿ることなく、同時に経済上の生産性をも意識しながら作家としての道を歩まねばならないという、まさに家計に不安を抱えた芸術家が直面する問題から終生解放されることのない生活を送っていた。ここに見られる彼の発言には、知的文化の創造主でもある芸術家を本来支え育てていくはずの社会が、営利優先の商業主義の名の下に、その使命をしだいに失いつつある現実を嘆くというより、むしろそうした浅薄な社会に対する、あるいはエリオット＝パウンド、あるいはエミー・ローウェルなどに代表されるモダニズム主導型の文壇の先鋒に対するよりシニカルな感情が絡み合っているように思えてならない。ニューハンプシャー州の文学の最たるものは詩であるとしつつも、それが最も商品価値の低い

ものとして扱われていることを嘆く振りをしながら、いかにしてこの皮肉な現実を受容し、いかにして自らの文学の方向性を見失うことなく創作を続けていくかが、この時期のフロストの最大の関心事であったのだろう。詩人曰く、

時には 詩人が 実業家よりも はるかに実務的な
人間のようにならなければならないことがあるというのも 決して不思議ではない。
ただ 彼らの商品のほうが 売りさばくのに ずっと骨が折れるものではあるけれど。 (172-64)

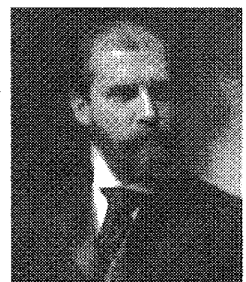
詩人としての名声を確立したのちも、常に財政上の問題を抱えていたフロストならではの、一種自虐的なアイロニーが込められた一節でもある。

いよいよ、第2パートも終盤。175行目から187行目では、全米一の紅葉の美しさを誇る西隣のヴァーモント州とニューハンプシャー州との地理的關係をユーモラスな喩えを用いて説明しながら、両者の緊密性や共通性に軽く触れ、合衆国で最も素晴らしい州の2つと詩人は持ち上げる。さらに187行目から209行目において詩人の目は、特にニューハンプシャー州北部、カナダやヴァーモント州の境界付近の地域へと移っていく。かなり大きな地図でもその名前を確認できないような集落が登場し、しかもそれぞれの名前がその地域性をよく反映している。ロスト・ネイションは、クース郡コネチカット川沿いのランカスター (Lancaster) から東7キロほどのところにある、ホワイト山脈西山麓の寒村。次のバンギー (Bungey) はロスト・ネイションの北40キロにある“Bungy”のことであろう。残る3つの町の名前を現在の地図上に見つけることは困難であるが、いずれも先の2つの小村と同様に都市生活とは無縁の、ある意味で社会から置き去りにされた(あるいは、隔離された)空間として、逆に文明に毒されずに生き続けてきた希有な世界の象徴と見てよいだろう。特に、「おかしなくらい小さな町にとって、この2つの州は／楽しいところなのだ」(“Both are delightful states for their absurdly/ Small towns,” ll.186-87) という詩人の発言には、現代社会から取り残されてしまった、無用の存在とも思えるような小宇宙の存在を受け入れてくれるのは、ニューハンプシャーとヴァーモントの2つの州をおいて他にないという気概が込められている。

ところが、こうした小さな村落間にも、優劣を競うかのような滑稽な番付争いが繰り広げられるわけだが、その象徴的なエピソードとしてここで取りあげられているのが、のちに合衆国第28代大統領となったウッドロー・ウィルソン (民主党、写真左) とチャールズ・エヴァンズ・ヒューズ (共和党、写真右) との1916年の選挙戦 (ウィルソン第2期目の選挙) である。ニューハンプシャーは伝統的に共和党支持派として知られているが、これまで民主党推薦のウィルソンやフランクリン・D・ルーズベルトなどを大統領に推したりしたことが何度かあり、現在でも全米で最も票の行方が読みにくい州 (a swing state) と言われている。いずれにせよ、ここには、ややもすれば勝者・敗者、強者・弱者といった相対的な関係に優劣の基準を定めようとしがちな人間の集団社会のヒステリックな価値観に対して、その無為性を面白可笑しく揶揄する詩人の素惚けた姿があるように思えてならない。



W・ウィルソン



C・E・ヒューズ

最後の210行目から214行目は、次の第3パートへの橋渡しとなるような、ニューハンプシャーとヴァーモントの相似性と、地理的な形状、特に山の形の違いについての解説になっている。この2つの州に対する抑制の利いた詩人の嗜好や愛情を伝える一節と言ってよいだろう。

以上、今回は長詩「ニューハンプシャー」の前半部の内容の分析およびそれに関連する事柄などを紹介しながら、各所で展開されている自由闊達な詩人の語りの特徴についての考察を試みた。そして、具体的な分析を通じて、ニューハンプシャー州という間口の小さな地点から合衆国全体の姿を浮かび上がらせようとする、フロストの牧歌的提喻法が、先にも触れた通り、彼にとって内なる世界と外なる世界を結びつける接点としての機能を十二分に発揮しているものであることがある程度確認できたのではないかと思う。つまり、都市社会から一步後退したニューハンプシャーの片田舎での極めてパーソナルな田園的生活に焦点を絞ることで、逆に合衆国の社会全体の歪みやその歴史の源流に向かって遡行する詩人内部の風景がより鮮明なヴィジョンとして映し出されるという、フロスト特有の一種の語り部的な叙述法の拡大化の実践例がここに示されているのが明確になったかと思う。以下、後半の第3パート、第4パートにおいて、この姿勢がより自由かつ具体的に描き出されることになるわけだが、それについては次の論考に委ねることにしたい。

(つづく)

* 本稿は、2004年度在外研究（長期）の成果の一部として発表したものである。

なお、『ニューハンプシャー』のテキストは、版によって行割りや句読法や用語等に多少の変動が見られるが、本稿では1923年の初版を底本とした。

注

- 1) John F. Lynen, *The Pastoral Art of Robert Frost* (Yale University Press, Inc., 1960), p.78.
- 2) N.L. Turn and John Zabizarreta (eds.), *The Robert Frost Encyclopedia* (Greenwood Press, 2001), p.230.
- 3) Sandra L. Katz, *Elinor Frost: A Poet's Wife* (Institute for Massachusetts Studies, 1988), p.97.
- 4) 彼女がフロストと初めて出会ったのは1915年12月、ボストンのある劇場でのことであった。フロストの詩作品が劇に脚色されて上演されていたのを彼女が鑑賞に来ていたのである。その後間もなく両者はハーコートブレイス社を通じて知己を結ぶようになった。当時彼女は、南ヴァーモント州の詩人協会の設立に関わっており、文学を通じて社会人教育の普及に努めていた。1919年9月初旬にフロストは、この協会から招かれて自作の朗読をおこなったが、この時訪れた南ヴァーモントの土地がすっかり気に入って、翌年ニューハンプシャー州を去ることになった。サウス・シャフツベリーのすぐ北に位置するヴァーモントの旧州都アーリントンの町には今も彼女の住居が図書館として残されている。フロスト一家は、引っ越し前に彼女の所有するこの「煉瓦屋」(Brick House) に一時寄宿していた。
- 5) Lawrance Thompson, *Robert Frost: The Years of Triumph 1915-1938* (Jonathan Cape Ltd., 1971), p. 151.
- 6) Louis Untermeyer (ed.), *The Letters of Robert Frost to Louis Untermeyer* (Holt, Rinehart and Winston, 1963), p.60, 65, pp.90-91.
- 7) Edward Connery Lathem (ed.), *Interviews with Robert Frost* (Holt, Rinehart and Winston, 1966), p.76.
- 8) Ralph Delahaye Paine: イリノイ州出身のジャーナリストで、小説家スティーヴン・クレインの友人。1899年に結婚し、以後ニューハンプシャー州ダーラムに住む。この記事を書いた翌1925年に54歳で亡くなった。
- 9) Reuben A. Brower, *The Poetry of Robert Frost* (Oxford University Press, 1963), p.207.

- 10) Lawrance Thompson, *Fire and Ice: The Art and Thought of Robert Frost* (Russell & Russell, 1961), p.148.
Robert Frost: The Years of Triumph 1915-1938, p.231にも Horace の諷刺詩 *Sermones* の特徴に関する詳しい説明が施されている。
- 11) John F. Lynen, *op.cit.* pp.61-79.
- 12) Mordecai Marcus, *The Poems of Robert Frost: An Explication* (G.K.Hall & Co., 1991), p.86.
- 13) Louis Untermeyer (ed.), *The Poems of John Greenleaf Whittier* (The Heritage Press, 1945), p.19.
- 14) Sandra Katz, *op. cit.*, pp.95-96.
- 15) ロバート・フロスト『ボストンの北』（藤本訳、国文社、1984年）、84-85頁。